

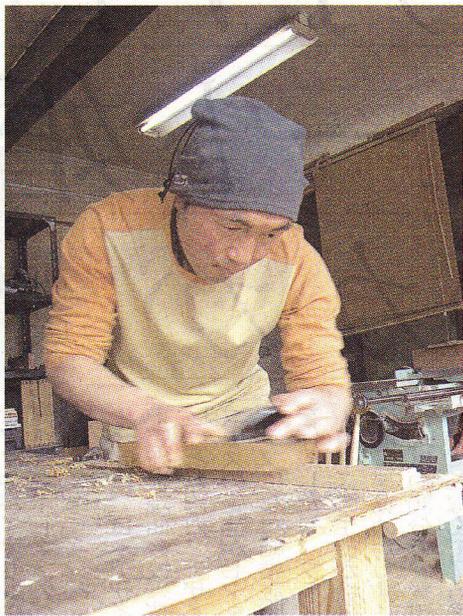
カルチャー

# 創

# つくる

木の手触りや存在感が好きだ。無垢(むく)材を使い、仙台市青葉区落合に2006年開いた工房で一人黙々と家具作りに打ち込む。名前はす

ばり「木の椅子(いす)工房」。家具全般を手掛けているが、その中でも、いすに対する思い入れはひときわ強い。「いすは、体に接する時間



木材にかななを掛ける佐々木さん

## 人ありきの椅子追求

家具職人

佐々木紀幸さん(41)

が最も長い家具の一つです。だから、単にデザインのかわつこよさとかだけでなく、座ると姿勢も気持ちも良くなるいすを追求しています。そんなこだわりで、依頼主の体形や好みに合わせて座面や背板を繊細に仕上げる。「使う人一人一人のためのいす作り」がモットーだ。

東北工大を卒業後に現場監督として4年間勤めたハウスメーカーを退職し、3年間アジアやヨーロッパをバックパッカーとして旅した。ヨーロッパに根付いたいすとテーブルの文化は印象的だった。「まず家具ありきではなく、『その人が、何をするために使うのか』を出発点に、家具の具体的ななたちが決まっていきます。あくまで人間が主体なんです」。そんなものの考え方が、心に響いた。



ささき・のりゆき 1969年生まれ。仙台市出身。東北工科大学部建築学科卒。「2003いわて手づくり工人創作展」に座卓と座いすのセットを出品し、奨励賞を受賞した。木の椅子工房では、ステンドグラスをはめ込んだ家具作りなども行っている。青葉区在住。

37歳で工房を開いた。「漢字で書いた『椅子』の字面自体が妙に好きなんです」と言つほど、いすに魅せられている。「でも、最初にいすを作った時は、勇気がいりました」とちよつと思いがけないことも口にする。「どう作ったらいいか分からなかった」からだという。デザインはやぼつたくない

か、構造的に長年耐えられるものか。デザインと構造のバランスを考え抜き、微妙な加減を施す。「いす作りは奥深い」。そうした確信があったからこそ、最初の一步を踏み出す際の武者震いだった。

家具ばかりでなく、機織り道具などの製作依頼も寄せられている。どんな物でも、より使いやすいように、細やかな目配りを行き届かせる。依頼主を思い、たっぷり手を掛けて個々の作品に愛情を込めていく。「『ものづくりを通して健康を考える』。そんな仕事をしていきたいですね」

(生活文化部・松田博英)